

あなたの看護師さん ～人生に彩(いろどり)を～



訪問看護ステーション彩
管理者 岸本 康子

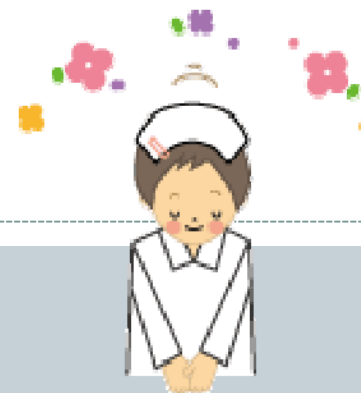
平成28年 9月 10 日

はじめに



1. ステーション紹介
2. 訪問看護の役割
3. 地域の中での訪問看護の位置づけ
4. 訪問看護事例
 - I 終末期を子供の為、家で迎えたい
 - II 認知症の母の笑顔が見たい
 - III 90歳でも青春、生き抜くことが目標
 - IV 残された時間を悔いない様に
5. まとめ

1.ステーション紹介



「私達は、利用者様が歩んでこられたそれぞれの人生の物語に笑顔で寄り添い、自分らしい時間を大切に過ごして頂けるよう、『彩(いろどり)』を添えられる看護を目指しています。」

訪問看護ステーション彩

事業開設して4年、現在常勤看護師5名、非常勤看護師2名
合計7名の職員体制です。

24時間緊急時訪問体制を整えて夜間の緊急時の訪問を実施しています。
今年度は滋賀県で4人目の新人訪問看護師の育成に取り組んでいます。

2.訪問看護の役割

病院完結型から地域完結型へ 治療から生活へ

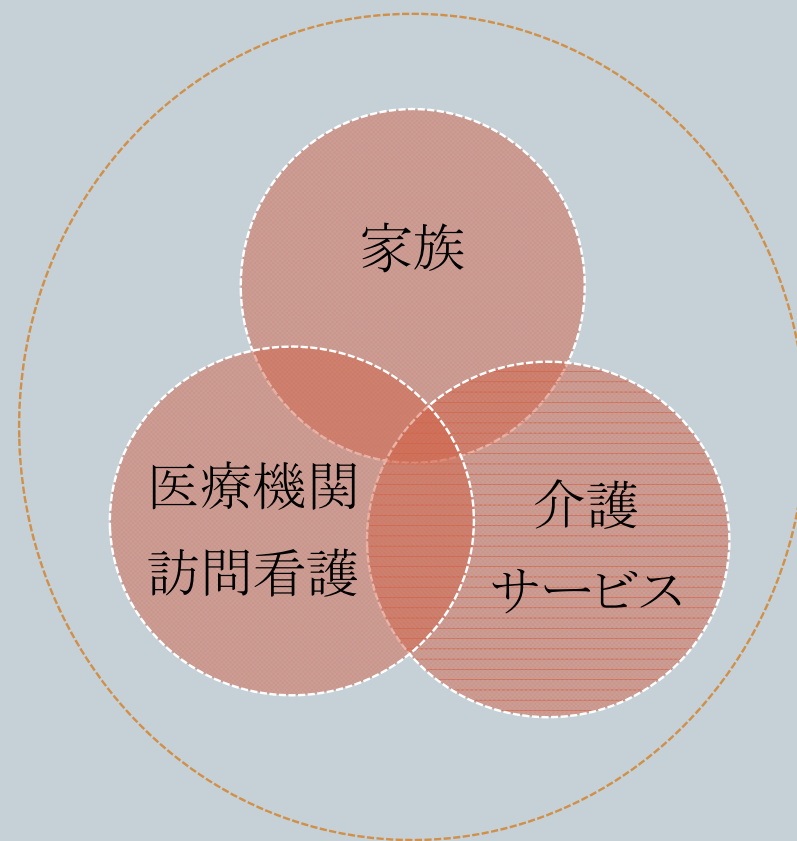
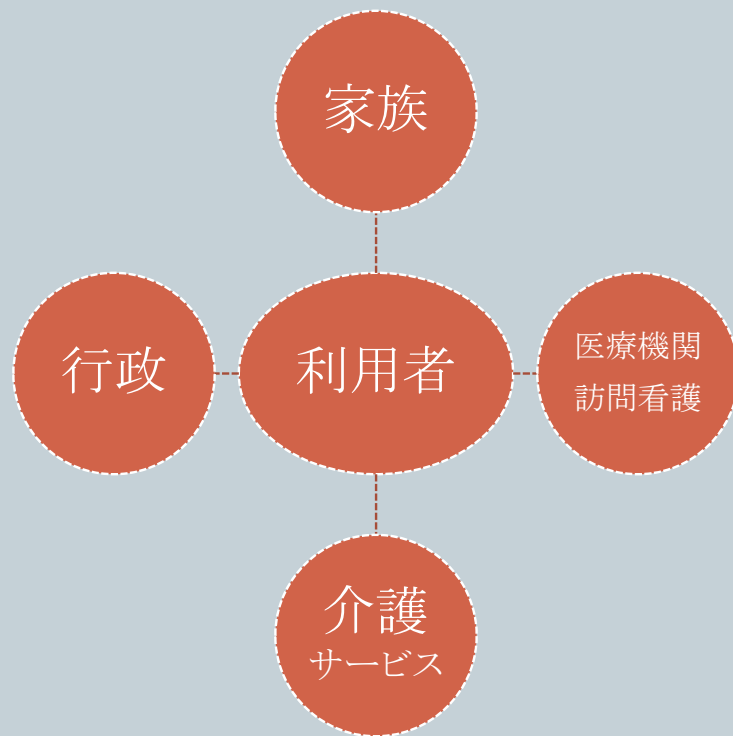
病院でのキーワード 「治療」「病気」

在宅でのキーワード 「生活」「生きる」

訪問看護師は病気だけに目を向けるのではなくて
生活を豊かにする事に重点を置き、病気や障害と
共に家で暮らし続ける事を支援しています。



3.地域での訪問看護の位置づけ



4、訪問看護の事例

I 「終末期を子供の為に、家で迎えたい」



I 「終末期を子供の為に、家で迎えたい。」

60歳女性、胃癌にて病院で手術、抗癌剤受けるも一年後転移。余命宣告され、娘さんの希望があり点滴のまま在宅生活となる。週に3回の訪問実施。口数の少ない女性であったが、家の雰囲気を楽しまれ、看護師との入浴を楽しみにされていた。状態が悪化してきても穏やかな表情は変わらず、亡くなる前日、希望にて娘さんと看護師とで入浴実施。浴槽にて「なあ〇〇ちゃん、私の役割終わったやろ。もうええやろ？もうこらえてな」翌日、静かに逝かれた。娘さんから「一人では見る事は出来なかった。不安だったけど看護師さんがいるから…安心できました。私が母を看取れたなんて… 幸せです。」

(個人情報の保護の為に内容を一部変更しています)

Ⅱ「認知症の母の笑顔が見たい」



80歳女性、娘さんと二人暮らし。認知症の悪化にて数年前より自宅に引きこもり状態が続いていた。介護保険の認定が下りてもサービスには結びつかない状態であった。ケアマネから依頼を受けて週に2回の訪問開始。当初全く受け入れられずそっぽ向かれた状態であったが少しずつ看護師に慣れて来られ、何とか訪問は実施できるようになった。近くのデイサービスに行けるように朝の送迎時に訪問するなど家から出ることができるように関わりを実施した。

なんとかデイサービス迄行っても玄関で帰ってしまわれたり玄関先で座り込んだりすることが5回程続いたが、根気よく声掛けさせて頂く事で、何とかデイサービスに5時間居られるようになった。娘さんから「何年振りかに母の笑顔を見ました。嬉しくて、嬉しくて」と喜ばれ、介護負担が軽減した少し手が離れた時間を趣味の時間に使われるようになった。

(個人情報の保護の為に内容を一部変更しています)

Ⅲ 90歳でも青春、生き抜くことが目標



90歳男性、肝臓癌、余命1か月。家族の希望にて在宅療養となる。家のリビングにベッドを設置。週に3回の訪問を実施。全身状態の観察、保清、内服管理を実施。訪問時妻が寄り添い、いつも静かな時間を過ごされていた。ある日、利用者の口からこんな話を聞くことができた。「なあ、看護師さん、わしはな、今青春真っ盛りなんや。青春ってのは若者だけのものと違うんや。目標をもって生きていることを青春って言うんや。今、わしは生き抜く！という目標をもって毎日生きている。だから青春のど真ん中」

それから1週間後逝かれた。家族は利用者の生きざま、死にざまが心の中に刻まれたと話され、家族で看取ることができたことを喜ばれていた。

(個人情報保護の為に内容を一部変更しています)

IV 残された時間を悔いない様に



35歳女性、膵臓癌。余命告知され、本人の希望があり在宅療養。点滴管理、内服管理、保清にて訪問看護が介入する。初めて訪問した際、在宅の目的を話される。「子供の授業参観に行く。子供と写真撮影する。子供と一緒にコンサートに行く。お世話になった人にお礼を言う」笑いながら話された。状態悪化するもこれらの事を成し遂げるために主治医・看護師の協力のもと、行動されていた。在宅にいる間に成し遂げられなかったのはコンサートに行くことでした。状態が悪化して病院に入院され、2週間たった時にご主人さんから連絡があり病院に伺った。ベッドに横たわりながら「ありがとう これでお世話になった人、皆にお礼を言うことができた。」

(個人情報の保護の為に内容を一部変更しています)



5.まとめ



21世紀前半は「がん」と「認知症」そして「精神的不安」を抱える人が増える時代と言われています。そうした人たちをどう支えるかが国民的課題となっています。そうした人たちが医療機関に入院するのは、人生の中ではほんの一瞬の出来事です。人生の多くを過ごす在宅で「自分らしく生ききる」のを支援するのが私たち訪問看護師の役割です。

現場では訪問看護だけでなく介護保険の事等、まだまだ地域に浸透していないことを実感することが多いのが現状です。皆さんに介護保険、そして訪問看護を理解していただき、住み慣れた地域・家で安心して生活するための一助として頂きたいと思います。

ご静聴ありがとうございました

